

プロローグ

独身寮で男達とー

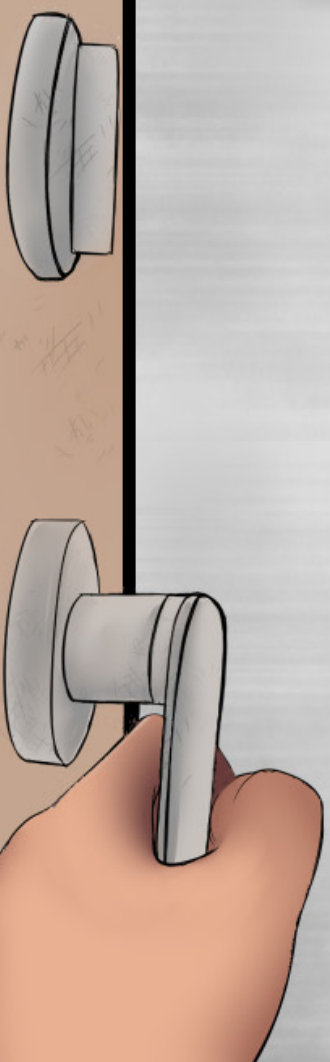


「は、初めまして……。
せ…性奉仕の、ご依頼を伺って…
わ、私、新人ヒーローの——」



「スゲーエーツ！
ほんとに来た(笑)
ささ、入って入ってっ」

「し、失礼します……」





扇情的なレオタード姿の少女は、若い男の家主に案内され、
小汚い独身寮の中へと入った。

「いや、役所のホームページ観て驚いたよ。
街の住民には新人のヒーローがタダで性欲処理してくれるって
書いてあったからさあ。
ネタだと思って頼んでみたらマジなんだもん。
ねえ？君が俺の相手してくれるんだよね？」

「え、えっと…あの…その……」



狭いアパートの1室には、成人向けのDVDや雑誌、使用済みのティッシュが散乱し、イカ臭い匂いが漂っていた。

粗暴な男と室内で2人きりの少女は落ち着かない様子でモジモジしている。

レオタードに包まれた大きな胸が少し動くだけで揺れ、男の視線は目の前の少女の身体に釘付けになった。

まだあどけなさの残る顔に不釣り合いの、大き過ぎる胸。
谷間を丸出しにしているハート形の穴は、
いかにもナニかを挟む用途に作られたかのようだ。

下半身も、レオタードのサイズが小さいのか
豊満な尻が窮屈そうに収まっており、
股間部もハイレグ状に食い込んだ様が卑猥だった。

（こ、この身体、今から俺の好き放題に出来るのか……！）
少女の身体を舐め回すように見る若い男の股間が
いきり立ち、ズボンを押し上げる。
男はニタニタしながら少女に話しかけた。



「へへ…ヒーローのくせに、そんな変態みたいな格好で知らないオッサン達の性処理して回ってんのか…
大人しそうな顔してエロいんだねえ、君」

「ち、違い、ます…っ
わ、私、エッチなんかじゃ…!!
こ、これは、パパと市長さんが、街の治安のために
仕方ないんだって、無理やり…っ」



「それにしても……大きいねえ、オッパイ…。AVでも中々見ねえよ、
こんなエロい身体…。君、今何歳??」

「は、はい…えっと……4歳、です……」

「4!? マジかよっ。■学生でこんな身体…!
も、もう我慢出来ねえっ!
オッパイ触るぞ! 触っていいんだよな!」

タッポ
ハッ
♡

タ
プ
ン
♡

「あっ……！」

年齢を知り、一層興奮した男は少女の返答も聞かず、目の前の巨乳を乱暴に掴んだ。

「す、すごえ……！柔らけえ！
めちやくちや気持ち良い……！
エロ過ぎだろ、このオッパイ……！」



一心不乱に少女の巨乳を揉みまくる男。
少女は目を瞑り、じっと耐えている。



「へへ、風俗以外でオッパイ触るの初めてだなあ。
しかもこんな若くて可愛い子の巨乳…
ねえ、サイズ幾つ？何カップあんの??」
「……」

「答えろよお。何センチあんのかって聞いてんだろお」

「は、はいっ…ひゃ、108センチの、Mカップです…っ」



「すっげ…!!三桁超えてんのかよ…!!
こんだけデカいと大変そうだねえ。
周りの男連中に揉まれまくってんじゃない??」

「…は、はい……昔から、クラスの男子とか、知らない人から触られたり…エッチなイタズラされたり…や、やめてって言うっても、みんなやめてくれなくて…。じよ、女子からは、イジメられたりして…あうう……」

会ったばかりの男に胸を揉まれながら、卑猥な質問に答えさせられる巨乳ヒーロー。よほど恥ずかしいのか、目には涙を浮かべている。そんな彼女を見て、粗暴な男は鼻息を荒くしながら両手の力を上げ、執拗に巨乳を揉みしだいた。



「い、痛っ…！お、お願いです、もう少し、優しく…」

「ハア、ハア…！こんだけデカけりや、そりやエロい目で見られるよなあ。
だ、ダメだっ。このままじゃ、揉んでるだけでイッちまう…！」

男は巨乳から手を離すと、その場で自身の服を勢いよく脱ぎ捨てる。
下着も脱ぐと、限界まで膨張したペニス飛び出した。

「さ、早速一発やらせてくれ…っ」

「ひあっ…！ま、待って下さい…！…ん、んや…！」

ギラついた眼で迫ってくる男に怯え、
巨乳少女は思わず逃げ出そうとするが、後ろから男に抱きつかれる。

「いやあああつ！
やめてえっ！離してえっ！」



「おいおい何逃げようとしてんだよっ！
俺の性欲処理しに来たんだろお？こっちは
お前のエロい身体のせいでもうギンギンに勃起してんだよ。
早くおマ●コに挿れさせろっての！」

「ごっごめんなさい……
せ、セックスは、やらない事になってて……」



「はあああ〜??何だそれえ?
期待させといて、本番は無しー?
そんな事許されると思ってたんのお?」

「あん…お、お尻…
押し付けないで…
やめてえ…っ」

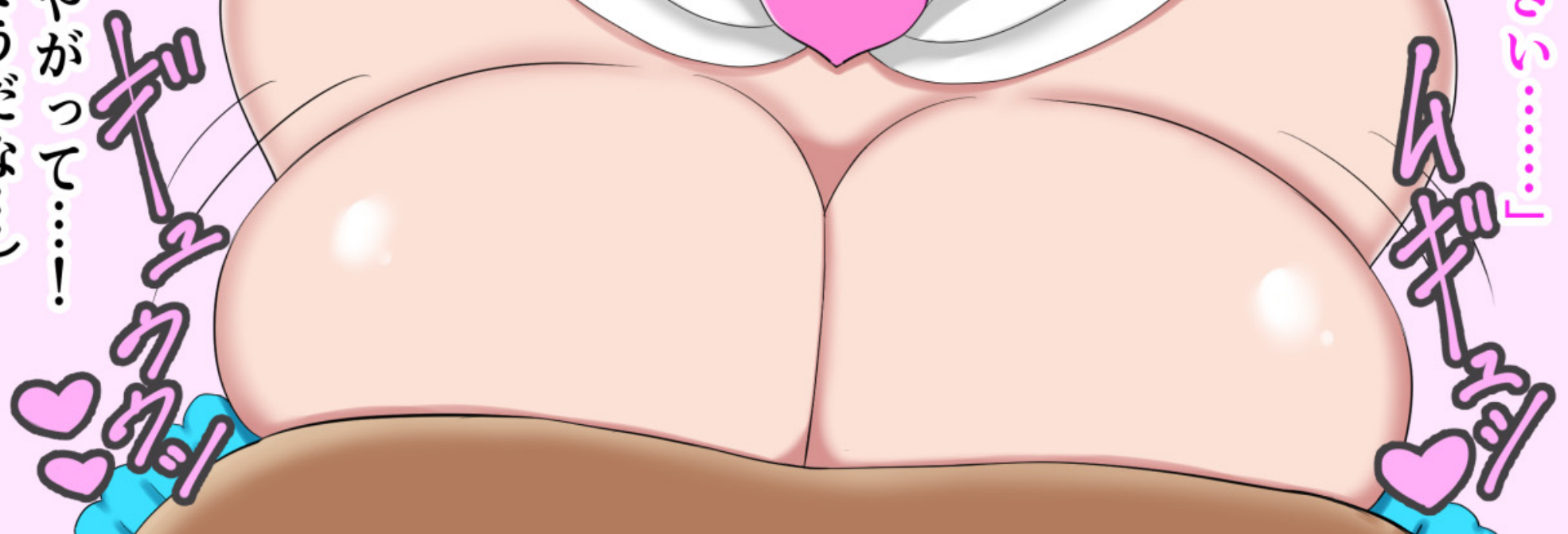
「いーやダメだ。やらせてくれるまで
帰さねえからなー」
「そ、そんな…っ」



「ご、ごめんなさい…セックス出来なくて…
でも、その代わりに、
お、オッパイで…オッパイで、
沢山ご奉仕しますから……許して下さい……」



（うおお!? オ、オッパイが…!）
男の胸板に爆乳を押しつけながら、
涙目で懇願する少女。
（こいつ…まだガキのくせに色気出しやがって…!
—でもこの乳でパイズリされたら凄そうだな…）
ぷにゅ♡むに♡と押しつけられる柔らかな感触に
粗暴な男も大人しくなった。



（まあMカップとやれるなんて中々無いしなあ…。
おマ●コよりもこのデカパイで抜いてもらおう方が
お得かも……）



「へええ、そのデカパイでご奉仕ねえ…
具体的にどうすんの？説明してよ」

「そ、それは、その……あ、あなたの
お、おち……おち●ちんを、む、胸で、挟んで……」

「パイズリしてくれるって事??」

「はい、そうです……わ、私の胸で、
パイズリを……あうう……」

カーア……



自分の口から卑猥な説明をさせられ、
少女は顔を真っ赤にした。
恥ずかしそうに身悶える少女の様子に、
男はいやらしい笑みを浮かべる。

「しょうがねえなあ。そこまで言うなら、パイズリで我慢してやるかあ。

楽しみだなあ、ヒーローちゃんのパイズリ♪セックスの代わりにやるってんだから、よっぽど気持ち良いんだろうなあ。

ささ、早くやってみてよ。

これでもし大したこと無かったら——
分かってるよね??」

「は、はい……」

偉そうに指図すると男はベッドに寝転び、勃起したイチモツを少女に見せつける。

哀れな巨乳ヒーローは、恐る恐るベッドへと近寄った。

「そ、それじゃ…し、失礼します……」

少女は頭を下げると、ミニマントからローションを取り出し
乳内を粘液で満たしたー



にゅぱ…



「あああああつ!! な、なんだっこれ…!？」

グ
エ
〜
♡



ギュウギュウのレオタードに締め付けられた
谷間の中へと挿乳した瞬間、昇天しそうになるのを
男はぐっと堪えた。

たっぷりのローションによって滑りをよくした
Mカップ少女の乳内の感触は、
男のイチモツがこれまで味わった事の無い極上の快樂だった。

(すっげえ…なんだこのオッパイ…
そ、その辺の風俗嬢のマ●コよりずっと気持ち良いぞ…!)

口を開けたまま震えている男に、
オドオドしながら少女が言う。



「えっえっと…は、始めますね…」

「ま、待った…!い、今動いたら…!」

「あ……ああああああっ!!
し、新人ちゃ……!!
あっあっあっ……!!」

たぽっ♡

たぱんっ♡

たぱっ♡

「どうですか……?
う、上手く出来てますか?
ごめんなさいっ私、まだ慣れてなくて……」

ずいっ♡

「き、気持ちいいいいいい!!
めっちゃくちや気持ち良いよ新人ちゃんのパイズリ...!こ、こんなの、は、初めてだ...!」
「あ、ありがとうございます...!」



男の返事に、少女はほっとした様子で奉仕を続ける。
動きはぎこちなかったが、たっぷりのローションと
Mカップがそれを補って凄まじい快感を生み出していた。

「ひ、ヒーローちゃん…っ
も、もう少し、もう少し優しく…!」

「え…や、やっぱり…あまり良くなりですか…?」



「ぎゃ、逆…! 逆だから…!
ぐ、具合が良すぎて…
アッアッアッ…!」

「だっ駄目だっ
こんなの、もう耐えられねえ……!」

びゅるるるる!!

びゅるるるる!!

「おと……!」



「あああつ……!と、止まらな……!
ま、まだ出るううう……!」



「ハア、ハア…すっげえ出た…」
「…いいかがでしたか？わ、私の…ご奉仕…」



「やバ過ぎでしょ(笑)爆乳ヒーローちゃんのパイズリ！
これじゃどんな奴も骨抜きじゃん」
「ご満足頂けたようで、良かったです……」

「でもなく、もっと味わいたかったのに
ヒーローちゃんが加減してくれないから
早くイキ過ぎちゃったんだよなあ…。」

「こりゃあともう一回くらいやってももらわないと」
「も、もう一回、ですか…?」



「ねえ、頼むよヒーローちゃん。これじゃかえって欲求不満だよお。このまま帰られたら、俺外で痴漢とかやっちゃうかも」

「うう…わ、分かりました…も、もう一度、おっぱいでご奉仕します…」

「ひひ♪やった。今度はじっくり満喫してやるっとう」

『くぅぅぅ…! すっげ、おっぱいに
チ○コ全部埋まって…!』



『ん…早く…早く終わらせなきゃ…
っ次の予約間に合わなくなっちゃう…!』

「へへ。それにしても、ヒーローにエロい事してもらえるなんてラッキーだなあ。しかもこんな巨乳で若い子に」

『あ、ありがとうございます……』



「まだ4歳って言うってたけど、パイズリ上手過ぎでしょ……
今まで何人くらいの男のチ●コ、このデカ乳で
逝かせてきたわけ??」

「ん……え、えつと……ひ、ヒーローになったのは、
一週間前で……その間でしたら……
た、多分……300人、くらい……」



「すっげえ……その歳で、もうそんなに……
へへ、今までパイズリしてやった奴等は、何で言っただの??
気持ち良かったって? (笑)」

「え、えっと…。最初の頃は、下手だったって言われて、怒られたりしたんですけど…。み、皆さん、最後には射精なさって、満足された様子で…」



「でも、乱暴な人が多くて…。ひ、酷い時は、わ、私のおっぱいは、玩具みたいに扱われて…」

「そんな事言って、ほんとは好きでパイズリ
やってんじゃないの〜？
男にオッパイ犯されて興奮してる変態だったりして」
「そ、そんな事、ありません…っ
す、好きで、こんなエッチな事……」



「ほらほら、動き鈍くなってるよお。
もっと気持ち込めてパイズリ奉仕してよね〜」
「あうう……ごめんなさい……」

「うっも、もう、そろそろ……」
「で、出そういですか？……ど、どうぞ、
私の胸で気持ち良く……しゃ、射精して下さい……」
「へへ、良いよ巨乳ちゃんっもっくとヒロの事言ってる」



「お……オッパイの中で……びゅーって……沢山、出して下さい……」
「ふひひ、乳の中にたっぷり出してやるよ……！」
「ほら、イクぞ、変態女！」

お、おっぱいの中……びゅくびゅく……つて……!!」

A collection of pink hand-drawn symbols including hearts and the letter 'V' with double vertical lines, arranged in a vertical column.

「おおおお…!! し、絞り取られるう…!!」

びゅん
びゅん
♡♡

びゅん
♡♡

むち♡

♡むち



「フウ…フウ…い、一発目より濃いの出たあ…。
あゝ、ヒーローちゃんさんのMカップパイズリ
最高に気持ち良いわゝ、病み付きになりそうっ」

「ん…わ、私のおっぱいで、お射精して頂いて…
ありがとうございます…」



ドロオ…♡

ネチャ…♡

「谷間どうなってるのか
見せてよ」

「あっ…」

「エッロ(笑)俺の精液で谷間ドロドロじゃんっ」

「ん……」



「へへ、カメラカメラ……後でシコッターに載せて
自慢しよう」と

「や、やめて下さい……さ、撮影は……」

「うるせーなく、いいじゃん写真くらいい〜」

「あつやべ。撮ってたらまた勃ってきたっ」

「ねえヒーローちゃん、もう一回挟んでよ〜」

「あ、あの、私……そろそろ次の予約が……行かないと……」



「そんな事言わないでさー。
俺もうヒーローちゃんのパイズリじゃないとー
あつそれじゃ連絡先教えてよー。
俺が呼んだらすぐ挟ませてねー。
セフレならぬパイフレ！」



「そ、そんなの、ダメですう……
ああん、もう帰らせてえ……」

ティッシュで精液を手早く拭き取り
出て行こうとする爆乳ヒーローを
捕まえて、しつこく言い寄る男。
すると、急に勢いよく玄関の戸が開き
大柄の中年男が室内へ入ってきた。

「おい、うるせーぞ！壁狭いんだからよお、
どうせまたデリヘルと揉めてーで、何だ、そのコ！
乳デケェー！！」

「騒がしいなあ、なんだよーあつ！
この子、街の新しいヒーローじゃん！

無料でパイズリさせてくれるって評判の奴！」

「あーっ！？パイズリヒーローちゃん此処に居たのかよ！
部屋で待つてても来ないと思つたら
お前のとこで詰まつてたのかっ！おいコラッ！！」
「ひえっ！せ、先輩達……！」

騒ぎを聞きつけて、社員寮のアパート中に居る
独身男達が部屋へと集まってきた。
彼等は新人ヒーローを見て驚くと、
すぐにニヤニヤと無遠慮な視線を向ける。

「パイズリヒーローって何だよ！
た、タダでパイズリしてくれるってホントか!?」
「へええ…めっちゃオツパイデカいし、結構可愛いじゃんっ」
「あ、あの巨乳で挟まれたら…ゴクリ……」

「わ、私、その…えと……」

ムチ♡

大人数の男達の期待と性欲に満ちた視線に、
巨乳ヒーローは脅えた。

（こ、こんなに大勢…10人以上も…
は、早く、逃げなきゃ…）



少女が動く前に男達は服を脱ぎ始め、ガチガチに勃起したイチモツをイジりながら脅える少女を取り囲んだ。

「へへ、金欠でしばらく風俗行ってなかったから、女なんて久々だぜ……！」

「俺も俺もっ。最近オナニーしてなかったから、もうバッキバキだ……！」

「ちよっ先輩達、俺の部屋でおっぱじめないで下さいよ！」



「ま、待って下さい……！わ、私、次の訪問先に行かないと……！」
「逃がさねえぞ、そんなエロいカラダ見せられて、我慢出来つかよ！」

「でもよお、パイズリってホントに気持ち良いのかあ？」
「どうせならおマ●コの方が…」
「両方食べ比べしたら良くないっすか？」
「おっいいねえ！それじゃ最初におマ●コイツとくか〜」
「ぼ、ぼぼ僕、童貞なんですけどっ
本日卒業させて頂きたく…!!」

「あ…あの…こ、困ります…私…せ、セックスは
しなくていいって約束で、性処理のお仕事を…」



男達は少女を無視してジャンケンを始めると、彼女を犯す順番を決めた。

「やったー！オレが二番乗りイ！」

ゲヘヘ……ヒーローちゃん、まずは一発ハメさせてね。」

あ、ゴムは持ってないから、生でもいいよね??」

シクシク

シクシク

「あ……ああ……いい、嫌……嫌……」

不衛生な小太りの中年が目の前まで近寄り、勃起したペニスを見せつける。

あまりのおぞましさに震えるヒーロー少女は、その場で泣きながら土下座した。



「ごっごめんなさいっ…!! わ、私…処女なんです…!!
セックスだけは…!! セックスだけは許して下さい…!!」

「はあ…!? なんだそりゃあ?? 処女だからセックス
出来ませんって……世の中ナメてんの??」
「てめえ俺達の税金でヒーローやっってるくせに
おマ●コ出来ねえってどういうつもりだ!?!」
「そうだそうだー!」
「税金ドロボー!」



「うう……ごめんなさい……ごめんなさい……
か、代わりに、私の胸で……パイズリで、
満足されるまでご奉仕しますから……
ゆ、許してください……」

ポヨーン♡

「あーあ……泣いちゃったよお」

「しょうがねえな。そこまで言うなら
パイズリで勘弁してやるかあー」

ポヨーン♡

「その代わり金玉カラッカラになるまで
デカ乳犯してやるからなあ。覚悟しろやつ！」

「あ、ありがとうございます……あうう……」



土下座して男達に懇願するその姿は、

とてもヒーローだとは思えない憐れなものだった。

下衆な男達は偉そうに譲歩してやったかのような物言いだ、

視線は彼女の爆乳に釘付け、すっかり魅了されていた。

ドキドキ



（デツケエ…間近で見るとほんとスゲエな、この爆乳…）

（は、はやく挟みてえ…!）

ドキドキ

「ほ、ほらっヒーローちゃん、最初は俺なんだからさ、

早くオッパイで挟んでよ!」

「は、はい……」

ヒーロー少女は中年男の前に
ひざまずくと、野暮ったいイチモツを
谷間の中にずっしりと挟み込んだ。

「うああああ!!
すすっげえ!!
ち、乳圧ヤバイ……これエ!」



『あっあっあっ…!!』



「すっげえ迫力…！絶対気持ち良いだらあんなの…」
「何カップあんだよあの巨乳っ」

「へへ…新人ちゃん、Mカップらしいっスよ」
「え、エム!?…やつべ…は、早く変わってくれえ…っ」

パ
ン
パ
ン
パ
ン

カ
ア
ア

グ
リ
ム
グ
リ
ム

（み、見られてる…オッパイで、こんなエッチな事してるの…
め、目の前で、沢山の男の人達に…
は、恥ずかしいよお……）

（と、とにかく、早く満足してもらって、終わらせなきゃ…）
「き、気持ち良くなったら、我慢なさらず、
いつでもお射精して下さいね…」



「は、はひいいいい…っ。スゴク良いですう…!!
ヒーローちゃんのデカパイズリイ!
じ、自分でオナニーするよりずっと気持ちイイイ…!!
こ、こんなの直ぐに出ちゃうう…!!」

「おい見ろよこいつ…なっさけない顔して
パイズリされてら(笑)」
「し、仕方ないだろっ。こゝんな乳で、パイズリされたら—
あっあっあっ…!」

ヴェル
ク
ク
!!

「きゃ…!」



「はああああ…!!
も、もう出ちゃったあ…!!
お、治まるまでギュって挟んでえ、ヒーローちゃんん…!!」

(ん……す、凄い量……中で……びゅくびゅく……つて……)



「ず、好きイ…ヒーローちゃんのパイズリ、好きイ…!!
ず、ずっと挟んでて欲しいいい…」
一発目を出し切った中年男は、痙攣しながら
金魚のように口をパクパクしている。
「あ、ありがとうございます……」

「おいっ早く変われよ!後がつかえてんだぞ!」
「うるさいな、せっかく余韻に浸ってんのに」
「け、ケンカ、しないで…お一人ずつ、ちゃんとやりますから…」
「ふへへ、ヒーローちゃん優しい」



「へへ…俺は縦で挿れてやろっと。
こんなにデカかったら余裕でしょ。
ほら、オッパイ寄せてっ」

「はら……ん？ んらですか……？」



「うおお……ね、根本まで入ったあ……っ」



「ハア、ハア……！こ、腰止まんねえ！
す、すげえや、この乳、マ●コに挿れてるみたい……
いや、それ以上……！」
「あんっ……は、激しい……」



男はヒーロー少女の爆乳に何度も腰を打ち付ける。
まるで自分が気持ち良く射精するための道具としか
思っていないかのような扱いだ。

激しい縦パイズリに少女の手が緩むと、男が声を荒げた。
「おいつもつと乳寄せろよっ。つたく、気が利かねえなあ」
「は、はい…ごめんなさい……」



「ハア、ハア…そ、そろそろイきそう…ウッ！」

「あひ……！」



「おお……！ぜ、全部、乳内に出してやるからなあ……！
しっかり挟んどけよお……！」

「ゼエ…ゼエ……すっげー濃いの出たあ…。
この乳オナホヤバ過ぎ…」
「へへ、良いなあ。オレも縦でやってもらおっかなあ」
「は、はやく順番…まだかよお」



「つ、次の方…どうぞ……」
少女は弱弱しく次の男を促すと、
谷間にベツトリと付着した精液を
ティッシュで拭き取り、再び胸を犯される
準備をした。

「はいはいっ次はオレね〜。
69っぽくやつてみてよお。
ほら、尻こっちに向けてっ」

「こ、こう、ですか…?」
「や、やだ、この態勢…
恥ずかしい……」

ムチ♡

ムギョウク♡

「ぐひひひ、乳だけじゃ
なくてケツもでかいねえ
ヒーローちゃん♪」

禿頭の顔面に乗り、
巨尻を押し付けると
男は鼻息を荒くして喜んだ。

少女は羞恥に悶えながらも、
勃起したペニスを谷間に包むと
性処理を始める。

プリン♡



「ああ…良いよお…そ、そのまま、口も使ってえ…っ」

「は、はいーはむ…んちゅ♡…じゅぷ♡…」

「おおおお…！た、たどたどしいけど、それがまた…っ」

（あうう…く、口まで、使うだなんて…
でも、これで早く終わるなら…）

ちゅ
ぱ♡

ちゅ
ぽ♡

少女は男達の要望には出来るだけ応えた。
早くこの凌辱から抜け出したい一心で、
不慣れなパイズリフェラで男のイチモツに奉仕する。

「あゝ、ヒーローちゃんサービス良いい……へへ、それじゃオレもお返しに!」

禿男は少女の巨尻を鷺掴むと、口でレオタード越しに秘部を刺激し始める。

「…!? んんみゅ、んん…!」

「ほらほら。逃げないでよヒーローちゃん。んっ。せつかく気持ち良くしてあげてんだからさあ」

突然性器を愛撫され、思わず抵抗する少女を逃がすまいと尻を掴み、辱める男。恥ずかしがる彼女の反応を面白がっているようだった。

「イヤあ……! き、気持ち、悪い……!」
「は、早く……! 早く終わって……!」

ちゅぽ♡♡♡

「あああああ…!!イクっイクっ出ちゃう…!!
ぜ、全部飲んでっ!」

「んんんっ!!」



「へへへ…飲んでもらおうと思って出るタイミング
黙ってたんだ。ねえヒーローちゃん、オレの精子おいしい!」

「うわあ、悪い奴…っ」

（んん…に、苦い……っ、こんなの、美味しいわけないよお……）

グワ…

レチュ…

苦しそうに精液を飲まされる巨乳ヒーロー。

そんな彼女を見て興奮したのか、

一番大柄の横暴な男が声を荒げる。

「ハア、ハア…も、もう辛抱出来ねえ!おい、次は俺だ!

早く変われ!!」

「ま、待って…っ。お、落ち着いて」
「うるせえ！もう待ってられるかつ！」

巨体の男は乱暴に少女を押し倒すと、馬乗りで
強引に特大のペニスを挿乳した。

「ぬおおお…！すげえ、俺のチ●コでも

全部埋まりやがった…！ま、まだガキのくせに

とんでもねえデカパイしやがって…！

犯しまくってやるからなあっ!!」

ギューウウウ♡

スプーッ



「い、痛い……! や、やめてえ……乱暴なのイヤあ……」

独りよがりて乱暴な馬乗りパイズリに
少女は悲痛な声をあげるが、それを無視して大柄の男は
自分より一回りも若い少女の爆乳を一心不乱に犯しまくる。

「こゝこいつあスゲエ……！チ、チ●ポとろけそうだ……！
腰止まんねええええ……！！」



「も、もう長く持たねえ……!!
乳の中、一発ぶちまけてやるからなあ……!!
受け取れえ……!!」



「いやあああああ!」

「おおお……!こん濃いの出るううう……!」

ズ
ズ
ズ
ズ
!!



「ふう……ふう……やつと治まった……。
とんでもねえ名器だな、このデカ乳……っ」

「ん……ま、満足されましたか……？」

わ、私の胸でお射精して頂いて、ありがとぅございまー」



「ぎゃあー！えっあ、あの、お、終わったんじゃ……っ」

「二発だけで満足出来っかよ！
もう一回使ってやるからなあ……！」



ズ
メ
ッ
♡

ズ
メ
ッ

ちゅっ
ちゅっ

ハ
ッ
ッ
♡

「そ、そんなあ、主任…！みんな一発ずつやってんのに…
もつと協調性持つて下さいよお」

「うるせえバカ野郎！このガキの乳が具合良過ぎんだよ！
辛抱出来ねえなら俺がヤッてんの観ながらセズリこいでろ！」

「ひ、酷いや主任…っ」



「お、お願いします……も、もつと、優しく……優しくして……」

「あー？何で俺がお前に気遣ってパイズリしなきゃなんねーだよ？好きにさせろやっ」

ズ
メ
ズ
♡

ズ
メ
ズ

ちゅっ
ちゅっ

ハ
ー
ン
♡

「お、おっぱい、擦れて痛いの……お願い、もう少し、優しく……」



「まったく、こっちはおマ●コ見逃してやってんのに
文句言いやがって…これだから最近のガキは…!」

「うう…ひぐ…ぐす…」
理不尽に罵倒され、巨乳少女は泣きじゃくりながら
胸を凌辱される。



「うつそろそろだな……。おい、お前のエロ乳のせいで
もう二発目が出そうだぞ。何か気の利いた事言えねーのかっ」

「ん……。わ、私の…。いやらしい胸を、使って頂いて…
ととても嬉しいです…。ど、どうか二回目も、
おっぱいの中で、いいイッパイ、射精して下さい……。」

「へへ…。しょうがねえエロガキだなあ…
お望み通りタツプリくれてやる…。!」





『あんっ……!!。いっいやあ……!!』

ズ
ズ
ズ
ズ
!!

ズ
ズ
ズ
ズ
!!

「ふう……ふう……たまんねえな、この乳オナホ……
何発使つても飽きそうにねえや」

「あ、ありがとうございます……うう……うう……」

主任男の荒々しい陵辱パイズリの影響からか、
部屋は異様な熱気に包まれていた。

順番待ちの男達は血走った目つきで精液で汚された
少女の爆乳を凝視し、今にも襲いかかろうとしている。

トロオオ……♡

「や、やつとおれの番だあ！早くやらせろお！」

「イヤあああ！や、やめて……！ま、まだ、拭き取ってーっ」

プルン♡

プルン♡

「他人の精液なんか気にしてられっか！
——おおおおすっげえええええ！
ホントに名器だわ、この乳っ！やつべえ！」

「いや……っいやあ……っ！」

主任に倣い、後続の男は強引な馬乗りパイズリで容赦なく少女の乳を犯す。

「た、助けてえ…。ママ…ママあ…。っ」

「ひひ、なーにがママだ(笑)
こんなでっけえ乳して知らねえ男に
パイズリして廻ってるド変態のくせにっ」

「おらっ、そろそろ出すぞっ顔にまでぶっかけてやるっ」



「ぎゃああああ!!」

びゅる

う

う

う

う

う

!!

びゅん

びゅん
ん♡

「うおおおお…っ!
で、出る、出るううう!!」

びゅん
ん♡



「ラウ、ラウ……すっげー出た……。マジやべーわこのパイズリオナホ……毎日使いてえ〜」

トロォ……♡

グズ……

グズ……

プリン♡

プリン♡

「せ、先輩、もうそろそろ……!」

「うるせえなつ、分かったよ。ほら童貞君、代わってやるけど無茶すんなよお」

ドン……

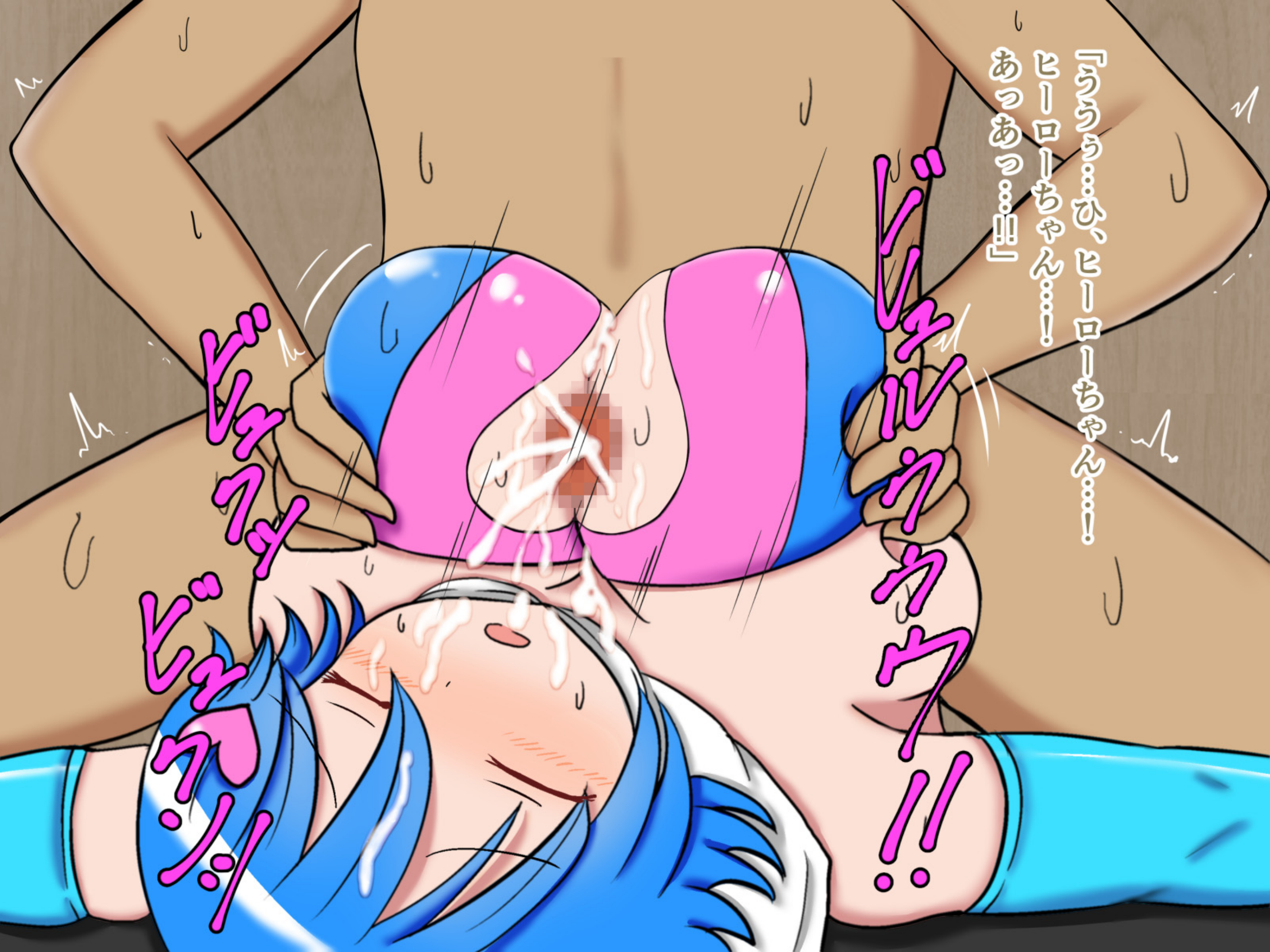
ビュッ……

「ハア、ハア……！お、おっぱい……！おっぱい気持ちいい……！
お、女の子の身体、さ、触るのも初めてなのに……
こんな可愛い子のでっかいおっぱいに挟んでる……！」

「ハア、ハア……ほ、本物のヒーローの、
生オッパイ……っ
気持ちいい……！！」



「ううう…ひ、ヒーローちゃん…!!
ヒーローちゃん…!!
あっあっ…!!」



「おいおい、童貞クン逝くの早過ぎだろ(笑)」

「フウ、フウ…好きイ…!」

「ヒーローちゃんのおっぱい好きイ…!」

ズ
ブ
ズ
ブ

グ
ン
グ
ン

「おい童貞!いつまでやってんだっ。
早く代われよっ!」



「いや、給料日前だったからヘルス行けなくて溜まってたんだよね。タダでパイズリ出来てラッキー♪」

「あのクズ市長も景気良い事やってくれるじゃねえか。明日も使いてえなあこのパイズリオナホ」

「この子今人気で中々予約取れないらしいんすよ。今回は俺に感謝して下さいよ」

乳辱される少女の側で愉快そうに会話する男達。少女は黙って横たわり、豊かな胸をされるがまま人形のように犯され続けた。

「ゼエ、ゼエ……。すっげー出たあ……」

（や、やっど……終わった……最後の人……。こ、これで、帰れる……）



十人目、最後の順番だった男が射精を終え、安堵する少女。
ところが男達は再びペニスを勃起させて少女を
取り囲んだままで、終わらせるつもりはまるで無かった。

「これで全員廻ったなあ。よし、それじゃ2周目行くかー」

「…!? な、なんでっもう、終わったんじゃー」

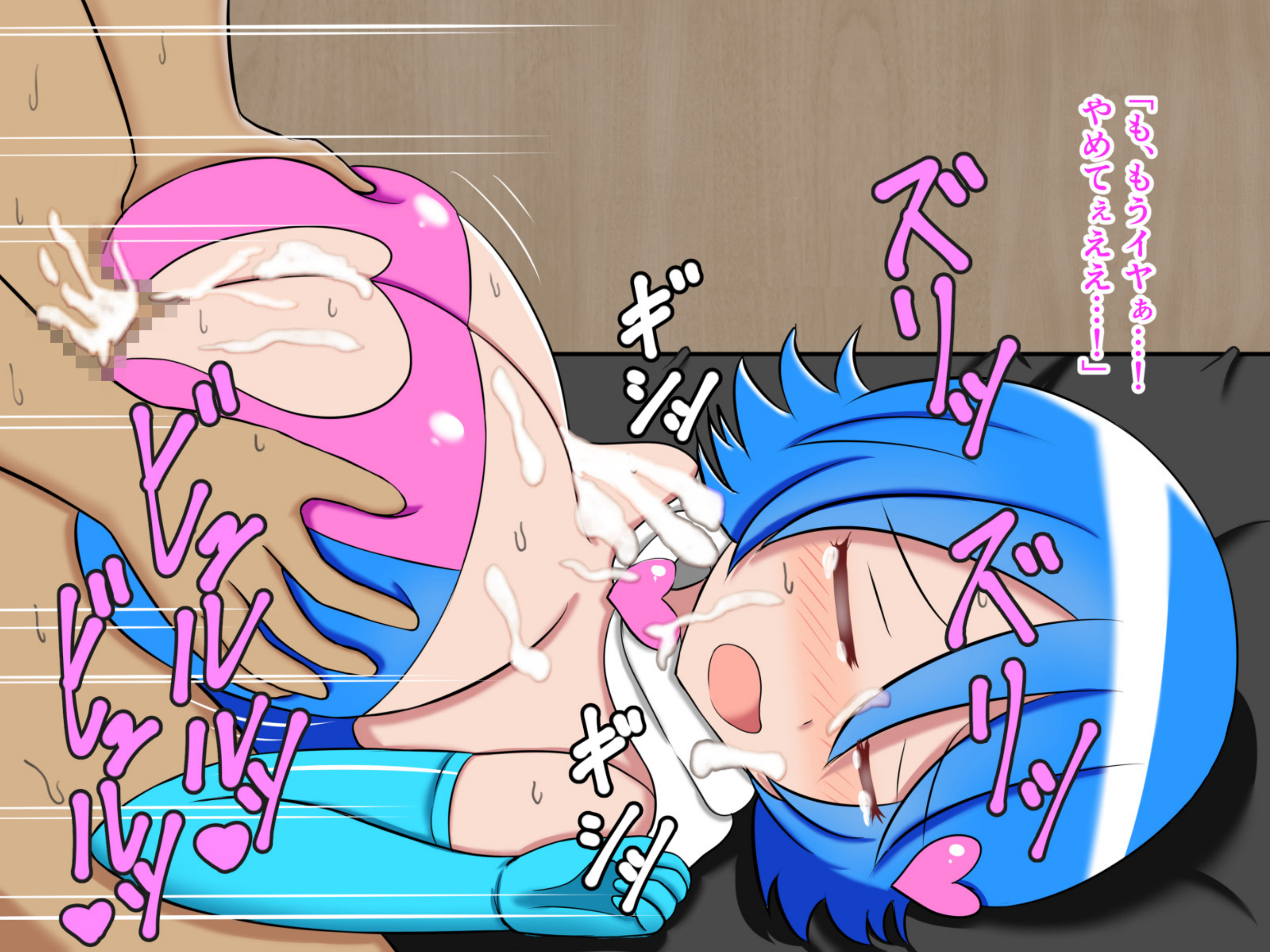
「二発ぐらいで満足出来るわけないでしょー？
それに主任とかは二発やつてもらってんだから
不公平じゃんかよー」

「予約も取りにくいからなあ。
次はいつになるか分かんねえし、今日は俺等が
満足するまで徹底的にやらせてもらうぜえっ」

「そ、そんな……や、やだあ……やだあ……」

「やだやだじゃねえんだよっ。
ほら、もう一回挟ませろっ！」

「もうイヤあ……！
やめてえええ……！」







「ふ...ふー」



「おいつもっとしっっかり挟め！
やる気あんのか！」

「ぐす...ぐす...めんなさー...」

「も…もうダメえ…これ以上は」

「まだまだ帰さねえぞお。次は俺だ、立て！」

男達の欲望は凄まじく、ぐったりとしている
ヒーロー少女に延々とパイズリを強要し、
彼女の胸を犯し続け性欲を発散させていった――



数時間後

「ご、5発目エ…出るう…!!」



「ゼエ、ゼエ……流石にもう出ねえや……
今日はお開きかなあ」

結局、全員が三発ずつ、主任男と童貞男に至っては
合計五発ずつヒーロー少女の胸を使い性処理を終えた。
「へへ、記念に写真でも撮つとくか」

「あースッキリしたあー」

「じゃあねーパイズリちゃん。また溜まったら
オッパイ使わせてねー(笑)」

「……あ……ん……」

谷間を白濁で汚された少女は中々起き上がる事も出来ず、
か細い声をあげた。

ド
ン
!

ド
ン
!

ようやく解放され、夜の住宅街をフラフラと力無く歩くヒーロー少女。時刻は既に深夜二時を回っていた。

「うう……やっと、終わった…。
だけど……ど、どうしよう……
予約、半分も終わってない……」

予定では、他の独身男や性犯罪者予備軍達の自宅を訪ねての性奉仕、
街の有力者へのパイズリ接待、
公園に居ついているホームレス達の性処理等を行
うはずが、まるで達成出来ずに終わってしまった。

「ま、またパパと市長さんに『おしおき』されちゃう……」

トボトボと歩きながら憂鬱になり、少女は涙ぐむ。

（どうしてこんな事になっちゃったんだろう……
私なんかがヒーローになつて……
こないやらしいお仕事ばかり……）

不幸にもヒーローとなつた少女、せいどうあいな正堂愛菜は
一週間前――突然父親からヒーローになれと言われ、
コスチュームを渡され……凌辱された日の事を思い返した――



街のパイズリヒーロー!!

~新人爆乳ヒーローは住民達の性奴隷~

続きは本編でー

パイズリCG35枚+差分!!

基本CG86枚